治以来の道東の医学史もまた、次第に変遷して来たわけで、それらの史実をできるだけ正確に記録に残さなければならないと思う。

この度の記念号を機会に少しずつでも実現できればと期待する。

私事ではあるが、平成10年に発刊した釧路市医師会50周年記念誌の中で、釧路市医師会発足後50年間にわたる時間外・休日診療の救急医療の経緯と題して私が執筆を担当した。その際、残された資料ではなく口答で直接お話しを聞かせていただきたく、故中沢悟郎先生を伺い、戦後の釧路市の状況を生々しく教えていただき、大変参考になったことがあった。先輩の先生がお元気な内にできるだけお聞きすることが重要であると認識したものである。

行政面の市町村合併は、それぞれの地域の温度差によりなかなか困難であるが、医療の分野では地域住民が全て均一に温かな医療に浴する機会が与えられなければならない。その意味では今回の一体化は非常に意義深いことだと考える。これからの目標として、

1）釧路管内（8市町村）における医療連携の強化
2）医師会組織体制の充実、強化
3）産業保健、住民検診、学校保健を含めた地域医療の向上・発展

のために手を携えて、更なる発展のために努力したいと意を強くしている所であります。

特に現在、当医師会の抱えている最も大きな問題である「救急医療体制の再構築」と「釧路看護専門学校の開校」に対しては、特に新会員の皆様方の協力、更に8市町村からの温かい御助力をお願いする次第であります。

（西池整形外科クリニック　理事長）

清　　算

釧路国医師会
前　会　長　麻　生　國　雄

医師会を解散するなら清算人を置けという。財産も借金もない法人なのに…と思ったが、言われてみればなにがしかの残務はあろうかと引き受けることになった。さて、清算となると想いは勝手に昔へと遡ってゆく。新生釧路国医師会は昭和二十二年に発足し、活動開始は翌年であったという。

昭和二十三年東京・・・。三年余りの疎開から帰ると、家は国に接収されており労働省の高官が住んでいた。しかし、あたりの街は静かだった。敗戦のどさくさが一段落したのか、ロシア大使館に程近く爆撃を免れた地域だったせいか、あるいは進駐軍にこれから本格的に清算させられるのを恐れて、大人たちが息を潜めていたためだったのか。一方、盛り場は違った。賑やかだった。せわしなく動き回る人々が皆それぞれに敗戦のつけを今支払っているとは知らず子供心を弾ませていたが、弱いものが無惨な清算を強いられる現場に出くわすことになる。六十年の歳月を越えて今なお鮮やかに蘇る二コマの光景がある。上野駅白昼の浮浪児狩り。追う者も追われる者も形相は凄まじく、到底人が人を追う姿ではなく、まさに狩りだった。同年代が逃げ惑いそして首尾よく逃げ延びる迄を小刻みに身体を震わせながら見つめ続けた。井ノ頭線渋谷駅、階段下の路上で当時第一高等学校生が南京豆売りをしていた。台に山と積んだ南京豆を一合枡で量り小袋に詰めて道行く人に売るのである。その一高生が左手に持った詰めたばかりの小袋を力一杯握り潰すのを見た。彼の視線の先には若い娘の姿があった。三人の進駐軍兵士に担がれ恐怖に声にならない悲鳴をあげ、手足をばたつかせながらジープで連れ去られる姿が・・・。ジープの廻りを十数人の男が取り囲んでいたが、手出しはおろか声を出す者すらなかった。皆拳を握り締めて耐えるほかなかった。

昭和四十九年北海道厚岸・・・。「四月はまだ寒いから六月がいいですよ」の助言に従って、五月末に神奈川から移り住んだ。この地に青山ありと踏んでのことであったが、動機が曖昧であると地元では警戒されてしまった。何か借りを返せずに逃げて来た筈なのに、本当のことを言わぬ奴というわけである。あけすけに「金か？女か？どっちなんだ？」と畳み掛ける始末。やむなく「いや、実は女のことで…」と言えばにっこり頷いてそれ以上は追求しない。なるほど、清算などめった

にできることではないから人はまず逃げるのだ。逃げることで仮清算して先へ進むのだ。逃げた先で一所懸命に生きるのも仮清算中の身であることをなんとなく判っているからなのだろう。七十年安保前夜、内科学教室を解散に追い込み医師連合を結成、大学内では改革の目処は立たぬと仲間と市中病院に散った。逃げたつもりはなく、医局改革に向かって前進していると思い込んでいたのだが、数年の内に仲間は三々五々大学に戻り、教室は復旧し、我々は敗北した。大学に戻る気になれず北海道に渡ったといえば、いかにも清算してのことと思われるがそうではない。学生時代、大雪十勝、利尻、知床と独りの山旅に出た。行く先々でそこに働く将来の自分を予感していたが、知床からの帰途、別海原野の落日を車中から眺めながら予感は確信に近づいていった。

「頑張らなくていい。当たり前にやれば感謝してくれるのだから」。院長の言葉に特別の意味が含まれているとは当時気付かなかった。言われるままに当たり前の診療に明け暮れ自分では充実した時間を過ごしていると思っていた。必要と思われる医療は存分にやらせてもらえたからだ。数年後、病院経営の責任を問われる立場に立たされた。いきなり今年の予算が組めぬと言う。大蔵省が認めている起債を支庁の地方係長が許可しないのだと。結局、起債を認めてもよいがその代わり今年度の病院会計の赤字は町が穴埋めするのかと詰め寄られ、町長が起債を取り下げてしまった。医者が存分に腕を揮う贅沢は許されぬと突きつけられているわけで、項垂れている場合ではなく本腰を入れて経営改善に取り組むことになった。

幾つかの工夫を重ね、一年間試験運転を行なった。年度末に予想外の黒字が出た。しかし町当局の反応は更に予想外だった。黒字が出たなら病院改革は無用である。そのまま、そのまま・・・。病院会計は黒字になったが国保会計が赤字になった。町にとっては同じこと・・・。保険者の規模が小さいと気付くのが遅すぎた。夕刻、看護婦の顔が蒼ざめてくるほどに頑張ったのがいけなかった。頑張らせておいて「無駄だったよ」とは言えない。身を引くことになった。切ない思いもしたが、一面やりようもあるのだと先へ希望を繋ぐこともできた。三十年前のことである。

今日、僻地医療は三重苦に喘いでいる。低医療費政策、大学の医師派遣能力の低下、そして地方交付金の削減である。前二者は僻地に限らぬことではあるが、より厳しい皺寄せを僻地は蒙っている。しかし、何より恐ろしいのは交付金の削減である。そもそも発足当初、国民皆保険制度は無医村でうまく運用できぬと踏んでいたのであるまいか。だからこそ交付金で国保診療所を整備させ、町村長に医者を呼んで来させ、そして当然のごとく生じた運営赤字に交付金を支給して穴埋めさせたのであろう。今になってその交付金を減らすという。全国の町村長の溜息が聞えてくるようである。それまで我々も腕をこまぬいていたわけではない。五十年続いた入院施設を閉鎖し、職員を大幅に減らし、安い薬を選び・・・。目前に迫るのは診療所閉鎖である。

効率を上げるのは悪いことではない。しかし自ずと限度がある筈である。過労死が多発し、核家族ですら崩壊する世の中は急ぎすぎと言わざるを得ない。いったい何に急かされて生きているのだろう。この頃こう思うことにしている。我々は今、敗戦のつけを払わされているのだと。バブルが弾けたという言い方にはどこか責任逃れの臭いがする。経済戦争に敗れたと言うべきであろう。総力戦に敗れた時と違い玉音放送も無ければミズーリ号の調印も東京裁判もない。食料も余っている。それでも眼に見えない進駐軍にまたもや支配され、国民一人ひとりがバブル経済の清算をさせられていると思えてならない。

勝っても負けても戦後は乱れるという。旧来の束縛を解かれて、若者が手足を少々伸ばし過ぎるからであろう。悪いことばかりではない。若者の持つエネルギーが放出されて世の中が元気になるのだ。事実、先の敗戦後のどさくさの頃を日本人が最も元気だった時代と言い切った先達もいる。乏しい食料を分け合って飢えを凌ぎ、戦後の復興を成し遂げた経験はある。しかし今直面しているのは飢えではなく心の渇きである。必要なのは潤いであるが、僅かばかりの潤いを分け合っていては渇きは癒されぬとばかり格差社会へと向かっている。戦後の元気が出る世の中ではない。貧る勿れと自らに言い聞かせるのみである。

清算人が先のことに言及するのは余計なことに違いないが、一言触れて繰り言を終わりにしたい。

厚岸に着任して間もない頃、「何年経っても先生は旅の人だよ」と言われたのを思い出す。怪訝顔に向かって「三十年住んでみれば判るって」と。終の栖などと口にすること自体、流れ旅の身の上と承知しているからこそであると今つくづく思う。三分の一世紀とは少々長逗留になったが、旅の途中であることには変わりはない。清算などおこがましく口にする余裕はない。ひたする旅を続けるだけである。僻地医療とて同じこと。風前の灯火を見つめるのは心細い。「昔ここに診療所があったんだ」。そんな声が聞こえてきそうで寂しい。しかし、人の住むところ形はどうあれ医療は存在するはずである。山火事の跡の小さな芽のような医療を懸命に育てようとするはずである。その小さな芽を見込みが無いと踏み潰すのではなく、ほんの僅かでよいから潤いを与えて見守ってほしい。切なる願いである。

（浜中町立茶内診療所　所長）

新規指定医療機関

平成19年10月15日

医療機関名称	所在地・電話番号		開設者・管理者氏名
桑園整形外科	060-0008	札幌市中央区北8条西16丁目28-30 ☎011-633-3636	東　　裕隆
オアシスレディースクリニック	064-0922	札幌市中央区南22条西11丁目1-48 山鼻メディカルビル4F ☎011-512-2525	竹原　正輝
手稲内科リウマチクリニック	006-0022	札幌市手稲区手稲本町2条4丁目1-23　手稲本町2-4ビル ☎011-695-3900	津田　隆俊
はせ川クリニック	004-0873	札幌市清田区平岡3条6丁目1-53 ☎011-886-8836	長谷川　靖
鎌田眼科	066-0038	千歳市信濃2丁目 1 しなのビル ☎0123-26-7771	鎌田　昌俊
おぐらクリニック	041-0813	函館市亀田本町1-21 ☎0138-62-6100	小椋　庸隆
倶知安あづま眼科	044-0011	虻田郡倶知安町南1条東3丁目3-3 ☎0136-23-1146	東　　由直
たかはし内科呼吸器科クリニック	080-0013	帯広市西3条南4丁目14 ☎0155-20-5656	高橋　聡貴